



特集 II 快適環境の 海外事情

ここ数年、快適性、アメニティという言葉がよく聞かれる。環境問題における一種の「流行」のようである。

環境庁では、昭和59年度より毎年20市町村近くを指定し、アメニティ・タウン計画の策定を進めている。これらの結果をみると、快適環境の対象範囲がそれぞれ異なっており、その違いは地域の経済基盤、歴史によることが多い。本誌でも、これまで快適環境に対する読み物を掲載してきたが、今回は地域による快適環境の違いを追求することを目的として「快適環境の海外事情」というテーマで特集を組んでみた。予想以上に地域による快適環境の違いを知ることができ、快適環境とはいったい何なのかということを考えさせられるたいへん興味深い特集となった。(古賀)

特集 II ドイツ

頑固アイマー (Eimer)

高橋良平

九州大学理学部教授
理学博士 当協会常任理事

年末、久し振りに机の中をひっかき直し整理らしいことをしていた所、奥の方に数枚をゴムバンドでとめた古びた葉書があるのを見付けた。書き出しに、「一昨年十二月渡独致しましてから……云々」とある。そうだ、あの時はまだ外国に行く人はきわめて少なく、ほとんどグリーン・パスポートの人だけに限られていた時代であった。明治時代の「赤ゲツト」程の悲愴感はなかったにせよ、ヨーロッパ・アメリカはまだ遠く距った異国であり、ジェノバまでの長い船旅は、吾々に異国での生活の不安や、送り出してくれた先生や同僚の期待にそむくまいとする覚悟(?)をいやが上にも感じさせた時代であったのである。ジェノバから汽車に乗り、やっとの思いでドイツに辿りついた思い出は、その後数回となく渡独した今日でもなお鮮やかで、古びた葉書をとりだした時でも先づその事が甦えてくる。最初の一年半住みついた所は、デュッセルドルフから郊外電車で40分程オランダ側に走った人口20万のクレーフェルトという町である。今ではデュッセルドルフのベッド・タウンとなり、数家族の日本人も住みついているようであるが、当時は日本人としては私1人で、二ヶ月に一回位、デュッセルドルフに出かけては、ケーニヒス・アレーにあった第一物産(財閥解体でまだ三井物産という名は名のれない時代である)で日本人旅行者が持ちこんでくる邦字新聞をむさぼるように「読タメ」していた。

戦後10年で奇蹟の復旧をとげ、日本と同じ敗戦国でありながら既に世界各国から留学生を呼んでいるドイツをそら恐ろしい国と思い、私なりにドイツ人氣質を分析したが、そのサイたるものに比類稀な「頑固さ」があろう。

文部省から支給された支度金で恐る恐るポータブルラジオ(ソニーの前進である東通工の製品である)を買い、大威張りでドイツに持っていった時代であったが、それでも日本の各家庭ではいち早く蛍光灯に切り替え町中も次第に明りくなりつつある時代である。ドイツでも勿論ポータブルラジオはあり、ベンツ、オペル、フォルクスワーゲンは既にかなりの民衆レベル迄買われている時代であったが、個人の家では決して蛍光灯に替えようとせず頑固に昔の電球をともし続けている。一事が万事そうであるらしく、「とっかえて総合的に得にならぬものはとっかえめーや、」「どうしてもとっかえる必要のあるものは直ぐにとっかえなくて済むよう頑丈なものにすべーや、」というのが基本になっているらしく、「伝統を守って。などと高尚な(?)判断とは余り関係のない体質的なものようである。デパートに手袋を買いに行った女房は、「小さいから大きいものを下さい」と懇願しても「私がよいといったらよいのです」と係員に叱られて買わされたとアキレていたが、事程左様に彼等の「思い込み、といおうか「頑固、といおうか、は徹底している。然し彼等の頑固さはそれなりに理屈の通るものが多い。例えば表題にあげたゴミ箱である。日本では当時木箱を使っていたがドイツでは既に金属製のものを使っていた。1.50m程の高さがあり、直径70~80cm、頑丈な蓋のついた代物である。決められた曜日、ゴミ蒐集車が回ってきて、各家庭のゴミを集めて回るのであるが、ひ弱な吾々日本人ではとても一人でもち上げられない重さである。この金属バケツは、地面より40~50cm程掘り下げたコンクリート穴にデーンと納められているので、ふだんは1m程の

高さとなり、女・子供でも容易にゴミ捨てができる。ゴミ集めの時は、人夫がひょいとこの大バケツをひきぬいて、くるくると頭の所を回しながら車迄運び、車の投入ステップにセットし、ボタンを押すと、大バケツは持ち上げられ、"シュッ、"という音と共に蓋があき、ひっくり返されてゴミ投棄は終るのであるが、持ち上げたバケツを掴むアームは頑丈で、ガチャガチャ、シュッという金属のぶつかり合う音、ねじる音が凄まじい。今、日本で使っているポリ容器だと、一回でバラバラになることは疑いない。彼等は能率的にゴミ集めをする為に蒐集車を作り、バケツをぐるぐる回して車迄運び、アームで持ち上げてゴミを捨てるために十分堪える強さのゴミバケツを作っているのである。それ以前のドイツのゴミ捨てがどんなものであったか尋ねなかったが、昨年9月、何回目かのドイツ訪問でみたゴミ集め風景もこの時と全く同じであり、ゴミバケツも数年使ったであろうかと思われる位、アッチ・コッチ凹んだものであった。彼等は歴史的にアメニティー環境作りを心がけていて、その一つの表れが清掃作業であり"頑固なゴミ箱、"であるように思われる。市街地では止むをえない事としてそのままにされているが、町はずれだと、州・市当局は鉄道沿線の家は借り上げて皆たちのかせ、菜園として貸し出していたり、電線・電話ケーブルはガス管と共に地下埋設して美観をうるようにしているが、これが大都会でなく私が住んでいた小さな Krefeld 市で既に30年前から行われているのである。

最近、快適環境作りがやかましくなってきた日本ではあるが、小手先きの環境作りでなくもっと根本的な変革が本気で検討されてい

るのであろうか？。社会資本の整備・蓄積を根幹にすえた都市づくり、国づくりが今こそ策定されねばならぬとしみじみ思う今日、今頃である。

問答集は謝を 野原のさす風

